

氏 名 : 佐野 浩三
学位の種類 : 博士 (芸術工学)
学位記番号 : 論博第 171001 号
学位授与年月日 : 平成 29 年 9 月 20 日
学位授与種類 : 学位規定第 4 条 第 2 項該当 (論文博士)
学位論文題目 : 神戸洋家具産業の明治発祥期から昭和の経済成長期における
事業化の経緯の構造化と社会的有用性の形成過程に関する研究
専門委員 : 齊木崇人教授、大田尚作教授、相良二郎教授、
森山明子 (武蔵野美術大学デザイン情報学科 教授)

審査結果の要旨

本論文は、神戸開港期 (1868~) に誕生した神戸洋家具産業が、西洋化による自由主義経済市場の下で、昭和後期までの約 120 年を経て、どのように社会に位置付けられ現代に継承されたかを明らかにし、神戸洋家具産業の事業化に至る経緯の構造化と、社会的有用性を形成する価値の推移を考究し、神戸洋家具産業の変遷過程とその特徴を明らかにした研究である。

著者は、これまで公に知られていなかった神戸洋家具産業の事業者の実態と、具体的な事例の調査から、明治の神戸開港期 (1868~) から昭和の経済成長期 (~1985 頃) までを 6 期の時代区分に仮設し、それぞれの時代の事業化の経緯と社会的有用性を形成する価値とその変遷を考究している。

論文は 7 章から成り、最後に資料 1・2 がついている。

第 1 章では、本研究の目的と研究の背景や先行研究を示し、開港時に発祥した横浜と東京芝の洋家具産業との比較を行い、神戸洋家具産業の地場 (地域) 産業としての立場を明らかにしている。ついで、研究の手法と用語、研究対象とする 6 期の時代区分を仮設している。

第 2 章では、明治の神戸開港から明治 20 年代 (1868~1889 頃) を、神戸洋家具産業の「発祥期」と位置付け、それまでの日本の大工技術を生かし先駆的な神戸洋家具産業の担い手となる船大工の眞木製作所と道具商の永田良介商店を含む先駆者 3 件と初期事業者 12 件が事業化に至る経緯を明らかにしている。

第 3 章では、明治 20 年代中期頃から末期 (1890~1911 頃) を「成長期」とし、合わせて大正期 (1912~1926 頃) を「変革期」として位置付け、「成長期」には神戸洋家具の製造と販売のそれぞれの専門事業者が集まる「神戸市西洋家具商組合」が明治 42 (1909) 年に誕生し、少なくとも 37 件の洋家具事業者が存在し、それらの事業連携により地域に定着する経緯を考察している。その後の「変革期」には、家具製造の専門知識と造形技術

を吸収したことで、製造（職人）と図案（設計士）の2つの技術が連携した「創造製作」の工程に再編される経緯を明らかにし、少なくとも113件の事業者が稼働していたことを明らかにしている。

第4章では、第二次大戦までの昭和前期（1927～1941頃）を「成熟期」とし、神戸圏域で郊外住宅地の生活文化が形成される経緯と背景をまとめている。加えて京都高等工芸学校で学んだ神戸洋家具産業の先進的事業者で3代目の店主永田善従が、欧州への視察を期にバウハウスなどで吸収した家具デザインの造形技術を活用し、顧客の体現する「郊外住宅地文化」の形象に応え、創造的な室内意匠と家具を合わせて提案・制作することで固有の「日本住宅向き西洋家具」が誕生した事業化経緯を明らかにし、この「成熟期」には、高額納税者に相当する131件の事業者が存在していたことを明らかにしている。

第5章では、第二次大戦終戦直後から昭和20年代末（1945～1954頃）を「復興期」とし社会混乱期における産業の再建状況をまとめ、次いで、昭和30年代から昭和末期（1945～1985頃）の高度経済成長期と呼ばれる急激な市場需要の拡大成長期を「競争期」と位置付け、神戸洋家具産業が「市場需要予測」による効率的な見込生産を行う市場発想優先の事業化を採用する経緯を明らかにし、伝統的な神戸洋家具産業関連の業者約100件のうち38社が工場を集団化した「協同組合神戸木工センター」を設立し、生産の合理化と労働環境の改善を図る過程を明らかにしている。加えて戦前の業態の店舗を構える神戸洋家具産業の事業者は10数件で推移していたことを明らかとしている。

第6章では、研究の総括として、仮設した6期の事業化経緯の構造化に社会的有用性を形成する価値要素を評価の視点に加え、明治初期の神戸洋家具産業の「技術価値」の発祥に「文化価値」が加わり、さらに「市場価値」が融合し「日本住宅向き西洋家具」が創出され、社会的有用性が形成される昭和末期までの変遷をまとめ、神戸洋家具産業の特徴と独自性を明らかにしている。

第7章は結語としている。

資料として、本研究を実施する過程で明らかとした、1.神戸洋家具産業関連年表、2.参考文献・資料一覧をまとめている。

これらの論考から本研究の特徴を以下の3点にまとめる事が出来る。

1 神戸洋家具産業は、神戸開港を期に神戸居留地や雑居地に住む外国人達の所有する家具の修理と再生販売を起点とし、神戸洋家具の制作技術は、塩飽大工を代表とする日本の伝統的な大工技術と職人技術が、時代の需要に呼応し発展し、特に工芸の専門教育を受けた設計士の設計と神戸洋家具の職人の造形技術との融合が、神戸地域の生活文化の担い手の要求に応え「日本住宅向きの西洋家具」の生産体制を継承していることを明らかにした。

2 神戸洋家具産業は、開港以降の自由主義経済下で、市井の需要に密着した市場立地型産業として始まり、神戸に立地する地域産業でありながら、国際的な視野と現実の生活文

化の相互関係の変化の中で能動的に事業を構想し発展し、その後の行政主導型の技術移植や指導に依存する事なく、構想から生産や販売まで自律性を保持してきたことを明らかにした。

3 神戸洋家具産業は、顧客の生活意識や地域文化の形象化を実現する為に、時代が求める社会的有用性を形成する技術的価値や市場的価値と文化的価値を統合して創造的制作を行ってきた一連の流れを、市場優先思考ではなく将来の地域文化を志向した仮説形成を伴う提案型の「統合的発想」として考究している。

これらの内容から、本論文は、明治開港期に誕生した神戸洋家具産業の西洋化政策と自由主義経済市場での発祥から昭和末期までの変遷過程と、事業化に携わる人々とその経緯の構造化と社会的価値の形成過程を考究し、神戸洋家具産業の特徴や独自性を明らかにすることによって、これからのデザインと産業のあり方と、芸術工学研究の方法に示唆を与える社会的に有意義性の高い研究である。

以上の博士請求論文の内容を、2017年8月3日公开发表の後、論文審査委員会の4名で最終試験を行い、論文の内容の説明と関連事項について質疑応答の審査を行い、合わせて本研究に関わる4編の投稿論文が芸術工学会で審査を経て採択されていることを確認し、会議の結果、合格と判定した。

よって本論文の著者は、博士(芸術工学)の学位を受けるに十分な資格を有する者と認める。